The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「孫子」の思想
Author(s)	神樂岡, 昌俊
Citation	懐徳. 1969, 40, p. 13-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90472
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「孫子」の思想

神樂岡昌俊

一

「孫子」十三篇は中國最古の偉大な兵書であり、從來「武經七書」のはじめにあげられている。

ここで取り上げようとするのは「孫子」十三篇にもられた思想であり、「孫子」の作者の思想ではない。「孫子」の作者と成書については古來、多くの疑問が出されている。本論に入る前に、このことについて簡單に述べておきたい。

「孫子」についての最も早い歴史記載は「史記・孫子吳起列傳」である。これによると、「孫子」は孫武の著作としている。孫武は齊の人で、兵法によって吳王闔閭に見え、後、將と爲り、伍員を助けて楚を伐ち勝利を得たと。ついで孫臏の記事を載せている。しかし、これについては古來異議が多い。即ち、「孫子」を子細に檢討すると、その內容は孫武の時代である春秋より後の戰國時代でなければあわないものがある。例えば、車戰は春秋時代のものであり、騎兵の使用とか、職業軍人といったものは戰國時代にはじめて出て來たものなのである。また、孫武の名は「春秋左氏傳」をはじめ、その他の古い書物にも見當らない。從って孫武の著作とはなし得ず、といって、孫臏の作といえるかというと、これまた疑問がある。確かに、孫臏のことばとされるものに、「孫子」の本文の內容とあうものがあるが、孫臏の個人的著作とみるところに問題がある。從って、當時の成書の狀態から考えると、「孫子」は春秋時代より戰國時代に至る時期の著作であり、孫臏が自己の軍事學說を加え整理補充したであろうが、それが傳えられ、その間に他の傳承をもまじえて、ある時期に一部の書としてまとめられたものであろう。

以下、「孫子」十三篇の思想の內容を檢討したい。

二

孫子は戰爭を孤立したものとしてではなく、社會中のその他の事柄と密接な關係のあるものと見ている。冒頭に

兵とは國の大事なり。死生の地、存亡の道、察せざるべからざるなり。（計篇）

とのべ、戰爭とは國の大事であり、人の生死、國家の存亡に關係するところであるから、愼重に考慮し、細心に研究しなければならないとし、戰爭で勝利を得るには、五つの先決條件＝五事をみたすことを求めた。五事とは何かというと、はじめに統治者は必らず民をして上の意志と一致せしめ、死生をともにして疑わないようにさせることを求めた。

民をして上と意を同じうし、これと死すべく、これと生くべくして、危わざらしむるなり。（計篇）

と。卽ち、政治のことである。次に有利な天時（天）、有利な地理（地）、よい指揮官（將）、よい組織紀律（法）の五つである。

この五つの條件の包括するところは甚だ廣く、多くの自然現象より、多くの社會現象に至るまでを含み、すべて戰爭に關係があるとする。その中で政治條件は第一の

地位を占めるのである。かくて、愛民と命令、敎育と紀律、厚賞と嚴刑を說く。

卒を視ること嬰兒の如し。故にこれと深谿に赴むくべし。卒を視ること愛子の如し。故にこれと俱に死すべし。（地形篇）

ひたすら人民を大切にし、兵士たちを嬰兒の如く、愛子の如く視るのである。つゞいて、

厚くして使うこと能わず、愛して令すること能わず、亂れて治むること能わざれば、譬えば驕子の若く、用うべからざるなり。（地形篇）

という。ただ手厚くするだけで仕事を與えて使うことができず、かわいがるばかりで命令することができず、でたらめをしても取締まることができないのでは、それは驕りたかぶった子供のようなもので、全然役に立たないというのである。敎育をした後に、もし紀律を守らなければ作戰をすることはできない。平時には、命令を貫徹し、服從の習慣を養成し、將帥と部下の兵士との融合をはかり、戰時には、部隊をいきりたたせ、士兵を勵まし、進攻戰には、士氣を高め、士卒を愛撫し、「無法の賞を施こし、無政の令を懸け」（九地篇）るのである。卽ち普通の規定を越えた賞を施こし、普通の定めに捉われない命令を揭げるのである。

また、外交關係については、

上兵は謀を伐つ。其の次は交を伐つ。其の次は兵を伐つ。其の下は城を攻む。（謀攻篇）

といい、最もよい戰略は、敵が我に向かって戰爭を發動する企圖を粉碎することであり、次は國際間の對立を利用し、敵を孤立させ戰爭させないようにすることであり、次は用兵作戰であり、最下は城を攻めることであるとする。

この他に、經濟との關係を指摘している。敵と我と双方の土地の大小による「度」、生産物産の多少の「量」、軍隊の衆寡の「數」、双方の力量の優劣の對比を形成する「稱」をあげ（形篇）、勝敗の物質的基礎としている。また

凡そ用兵の法は馳車千駟、革車千乘、帶甲十萬、千里にして糧を饋るときは、則ち內外の費、賓客の用、膠漆の材、車甲の奉、日に千金を費して、然る後に十萬の師擧がる。（作戰篇）

といい、長期の戰爭は經濟を破壞するとなす。軍が疲弊し、鋭氣がくじかれ、戰力が盡き、財貨が無くなると、敵はその困窮につけこんで襲いかかり、どんな智者がいても、その處置をすることはできない。これにより戰爭に對し、愼重な態度をとることを主張する。所謂「明君は之を愼しみ、良將は之を警む」（火攻篇）のである。

かくて、國內に立派な政治を布くことによって、民を悅服させ、賞罰は嚴正で、國富み、また列國との外交も禮節と威嚴とが調和して行なわれ、軍隊の訓練も嚴格であるとともに愛情に滿ちて行なわれ、兵士らは軍規嚴正で犯さず掠めず、戰場においては勇敢であるような國は戰わずして列國を屈服させることが出來るのである。

百戰百勝は善の善なる者に非ざるなり。戰わずして人の兵を屈するは善の善なる者なり。（謀攻篇）

用兵の法は、其の來たらざるを恃むこと無く、吾れの以て待つ有ることを恃むなり。其の攻めざるを恃むこと無く、吾が攻むべからざる所あるを恃むなり。（九變篇）

百たび戰って百たび勝つのは、最高にすぐれたものではないとか、戰爭の原則としては、相手がやってこないことをあてにしないで、いつやって來てもよいような備えが我が方にあるのをあてにし、相手が攻擊して來ないことをあてにしないで、攻擊できないような態勢が我が方にあるのをあてにする、という所以である。

三

孫子の戰爭觀ひいては人生觀は

善く戰う者は、人を致して、人に致されず。（虛實篇）

に要約される。主導性・主體性の把握の强調である。自分が主導權を握って、敵を思いのままにし、敵の思い通りにされることがないというのである。その主導權を握る鍵は、正確な情況判斷である。「五勝[1]」（謀攻篇）「六敗[2]」（地形篇）を列擧し、敵我双方の情況をはかる基準とした。さらに間諜（スパイ）の働きを重視し（用間篇）、天時と地形條件を掌握し、情況の分析を重視する。かくて

彼を知り、己を知れば、百戰して殆うからず。（謀攻篇）

という。もし情況を掌握しなければ、正確な判斷を下すことができないのである。

彼を知らず、己を知らざれば、戰う毎に必らず殆うし。（謀攻篇）

次に自己の弱點を無くし、敵を攻擊する機會を待つのである。

昔の善く戰う者は先ず勝つべからざるを爲して、以て敵の勝つべきを待つ。（形篇）

善く戰う者は不敗の地に立ち、而して敵の敗を失わざるなり。是の故に勝兵は先ず勝ちて而る後に戰いを求め、敗兵は先ず戰いて而る後に勝を求む。（形篇）

先ず味方を固めて敵に敗れない態勢をとったうえで、敵がすきを生じて、だれでもが勝つことができるような態勢になるのを待った。必らず自己の弱點を無くし、不敗の地に立ち、敵の敗れるようになった機會を逃さないのである。先ず勝利の條件を作らなければ、偶然勝利を得たとしても失敗するのである。

さらに絕對優勢の兵力を集中し、主導權をとり、衆を以て寡を擊ち、勝利をとる。

吾が與に戰う所の地は知るべからず、吾が與に戰う所の日は知るべからざれば、則ち敵の備うる所の者多し。敵の備うる所の者多ければ、則ち吾が與に戰う所の者は寡なし。（虛實篇）

人を形せしめて我に形無ければ、則ち我は專（あつま）りて敵は分かる。我は專まりて一と爲り、敵は分れて十と爲らば、是れ十を以て其の一を攻むるなり。則ち我は衆にして敵は寡なり。能く衆を以て寡を擊てば、則ち吾が與に戰う所の者は約なり。（虛實篇）

こちらの戰おうとする場所、時期、態勢を隱すと、敵はたくさんの備えをしなければならず、從って兵力を分散せざるを得なくなるのである。また、次のようにも言っている。

用兵の法は、十なれば則ちこれを圍み、五なれば則ちこれを攻め、倍すれば則ちこれを分かち、敵すれば則（すな）

能ちこれと戰い、少なければ則能ちこれを逃れ、若かざれば則能ちこれを避く。（謀攻篇）

孫子は自己が數量上、優勢の兵力を占めるのが、勝利を得る重要條件とした。敵の兵力を分散し、常に能く「衆を以て寡を擊つ」のであり、「戰う毎に必らず勝つ」のである。

さらに敵の弱點を作るのである。「示形」卽ち、實は強くても弱いようにみせ、勇敢でも臆病なようにみせかけ、近づいていても敵には遠いように見せかけ、遠方にあっても敵には近いように見せかけ、「誘敵」卽ち、敵が利を求めているときには、利をもって誘いだし、「擾敵」卽ち、敵が混亂しているときには、それに乘じて奪い取り、「怒敵」卽ち、敵がいきりたっているときには、それをかきみだし、「示弱」卽ち、敵が謙虛なときには、それをおごりたかぶらせ、「疲敵」卽ち、敵が安樂なときには、それを疲勞させ、「離間」卽ち、敵が親しみあっているときには、それを離反させ、敵の無備を攻め、敵の不意をつく（計篇）のである。

以上の如くにして機に先んじて、態勢を作るのである。ゆえに

勝　爲すべし。敵は衆しと雖も、鬪い無からしむべし。（虛實篇）

勝利は自己の力によって作ることができると考えている。

主導權、主體性の强調は進攻に連なり、持久戰に反對し、速決戰を主張するに至る。

進攻の爲めには、絕對優勢の兵力を集中する作戰を主張する。卽ち

十なれば則ち之を圍み、五なれば則ち之を攻む。（謀攻篇）

であり、攻防關係については、守備をするのは戰力が足りないからであり、攻擊をするのは十分の餘裕があるからであるとみている。

しかして進攻戰は速決がよくて、持久は利あらずとみている。卽ち

兵は拙速なるを聞くも、未だ巧久なるを睹ざるなり。久しければ則ち兵を鈍らせ鋭を挫く。……久しく師を暴さば則ち國用足らず。

兵は勝つことを貴ぶ。久しきを貴ばず。（以上、作戰篇）

といっている。これは先に述べた經濟と關連するものではあるが、それとともに主導性、主體性を確保するために缺くべからざるものである。

これを要するに、孫子にあっては、軍隊行動の主導性、主體性を確保するには、はじめに正確に情況を判斷

し、自己の弱點を消滅し、敵に乘ずべき隙を作らせるのである。優勢な兵力を集中し、敵の行動規律を掌握し、敵の弱點を作り、「先ず勝ちて而る後に戰いを求め」（形篇）るのであり、ゆえに「勝　成すべし」（虛實篇）と說く。

尙、ここで指摘しておきたいことは、既に述べたところにみられる現實的な態度と、分析的な態度である。ここで分析的な態度についてもう少し觸れてみたい。

孫子は現象より出發し、現象にかくされている本質を追求するのである。戰爭は常に同じからざる情況にある。迷濛複雜なものである。この迷濛複雜な情況卽ち現象を通して、敵の行動の企圖卽ち本質を追求するのである。

敵近くして靜かなる者は其の險を恃むなり。遠くして戰いを挑む者は人の進むを欲するなり。（行軍篇）

辭の卑くして備えを益す者は進むなり。辭の强くして進驅する者は退くなり。約なくして和を請う者は謀なり。半進半退する者は誘うなり。（行軍篇）

この中で孫子は逼近と遠近との同じからざる情況を分析し、從って逼近と安靜との對立、遠隔と挑戰との對立を現わし、敵が己の險を恃むと、人の進むを欲するの企圖とは卽ち本質を示している。敵の謙遜と强硬との不同、敵が眞に戰いに備うると、前進を裝うとの區別を分析し、敵の軍使の態度と敵軍の動態との矛盾を凝視し、敵が前進を準備するか、後退を準備するかの企圖を剔出するのである。

これを作して動靜の理を知り、これを形して死生の地を知り、之に角れて有餘不足の處を知る。（虛實篇）

敵軍を刺戟してこちらに應じさせてその行動の基準を知り、敵にはっきりした態勢をとらせて、その形勢を調べ、敗れる地と敗れない地とを知り、敵軍に小部隊で當たってみて、敵のどこが强く、どこが弱いかを知るのである。

注　①　五勝（謀攻篇）

故に勝を知るに五あり。戰うべきと戰うべからざるとを知る者は勝つ。衆寡の用を識る者は勝つ。上下の欲を同じうする者は勝つ。虞を以て不虞を待つ者は勝つ。將の能にして君の御せざる者は勝つ。此の五者は勝を知るの道なり。

②　六敗（地形篇）

故に、兵には、走る者あり、弛む者あり、陷る者あり、崩るる者あり、亂るる者あり、北ぐる者あり。凡そ此の六者は天の災に非ず、將の過ちなり。夫れ勢い均しきとき、一を以て十を擊つは曰ち走るなり。卒の强くして吏の弱きは曰ち弛むなり。吏の强くして卒の弱きは曰

ち陷るなり。大吏怒りて服せず、敵に遇えば懟みて自ら戰い、將は其の能を知らざるは、曰ち崩るるなり。將の弱くして嚴ならず、教道も明らかならずして、吏卒は常なく、兵を陳ぬること縱横なるは、曰ち亂るるなり。將・敵を料ること能わず、小を以て衆に合い、弱を以て强を擊ち、兵に選鋒なきは、曰ち北ぐるなり。凡そ此の六者は敗の道なり。

四

孫子はまた自然現象と社會現象は靜止不動のものではなく、不斷に變化するものと認識している。自然界にあっては「五行に常勝無し、四時に常位無く、日に短長あり、月に死生あり」（虛實篇）とする。所謂發展は事物の對立面の相互推移である。社會現象の一たる戰爭もその例外ではない。しかも、その變化は他の現象に比して更に迅速劇烈である。

亂は治に生じ、怯は勇に生じ、弱は强に生ず。（勢篇）と爲す。混亂は整治から生まれ、臆病は勇敢から生まれ、軟弱は剛强から生まれる。それぞれに動きやすく、互いに移りやすいものである。

自然現象と社會現象との發展變化には一定の規律があるが、此れと同じく戰爭の客觀的規律は認識することができる。

實を避けて虛を擊つ。（虛實篇）

がこれである。

このような動的なものの見方は、事柄を孤立的にではなく、全面的關連においてとらえることを要求する。例えば戰爭の勝敗の因素に對しては「五事」「七計」[3]（計篇）を列擧し、論じて將帥に到り、「五危」[4]（九變篇）「六敗」（地形篇）を提出し、それに關連して經濟財政に到る。戰爭の利をあげれば、その反面、戰爭の害をあげる。一切の事物は相反相成の對立面に在る。此れによって彼は戰爭の問題を觀察・分析するとき、すべて、敵我・主客・衆寡・强弱・攻守・進退・奇正・虛實・動靜・勇怯・久速・治亂・勝敗等の對立面より出發し、比較し、全面的結論を出す。

凡そ戰いは正を以て合い、奇を以て勝つ。聲は五に過ぎざるも、五聲の變は勝げて聽くべからざるなり。色は五に過ぎざるも、五色の變は勝げて觀るべからざるなり。味は五に過ぎざるも、五味の變は勝げて嘗むべからざるなり。戰勢は奇正に過ぎざるも、奇正の變は勝げて窮むべからざるなり。奇正の相い生ずることは、循環の端なきが如し。孰か能くこれを窮めんや。（勢篇）

正兵は正攻法で正面から敵と會戰し、攻擊し、奇兵は奇襲法で側面から敵の不備をついて勝つのである。敵形の變化に隨って、正兵は奇兵と爲すべく、奇兵は正兵と爲すことができるのである。

兵の形は水に象る。（虛實篇）

兵に常勢なく、水に常形なし。能く敵に因りて變化して勝を取る者、これを神と謂う。（虛實篇）

軍の形は水の形のようなものである。水が高い所を避けて低い所に流れるように、軍の形も敵の充實したところを避けて、備えのない虛のところを攻擊するのである。水は地形によって流れがきまるが、軍も敵情によって勝利が決まるのである。だから軍にはきまった勢いというものが無く、敵の變化によって勝ちを取ることができるのである。

また、「實を避けて虛を擊つ」には、敵を思いのままに動かさなければならない。

能く敵人をして自ら至らしむる者は、これを利すればなり。能く敵人をして至るを得ざらしむる者は、これを害すればなり。故に敵佚すれば能くこれを勞し、飽けば能くこれを饑えしめ、安んずれば能くこれを動かす。（虛實篇）

故に我、戰わんと欲すれば、敵　壘を高くし、溝を深くすと雖も、我と戰わざるを得ざる者は、其の必らず救う所を攻むればなり。（虛實篇）

敵の逸を對立面の勞に轉化させ、飽をその對立面の飢に轉化させ、安をその對立面の動に轉化させる。戰爭の指導はこのような變化の工作である。戰爭規律を掌握し、勝利を豫見することができる。

ゆえに「勝は知るべし」（形篇）「故に能く勝敗の政を爲す」（形篇）「故に能く敵の司令と爲る」（虛實篇）のである。

また、戰爭はそれぞれ特殊性を持っている。その特殊性を分析し、同じからざる戰法を用いて、同じからざる戰況を處理するのである。

孫子は戰爭はもともと對立的統一體であるとみている。利がある反面、害があるのである。ゆえに

盡く用兵の害を知らざる者は、則ち盡く用兵の利を知ること能わざるなり。（作戰篇）

敵の隙に乘ずるの可能性が有るのであり、敵にはすべて實が有り、虛が有るのである。

前に備うれば則ち後寡なく、後に備うれば則ち前寡なく……備えざる所なければ則ち寡なからざる所なし。（虛實篇）

このことより、まさに實を避けて虛を擊つべきである

とする。

注 ③ 五事七計（計篇）

故にこれを經るに五事を以てし、これを校ぶるに計を以てして、其の情を索む。一に曰わく道、二に曰わく天、三に曰わく地、四に曰わく將、五に曰わく法なり。道とは、民をして上と意を同うし、これと死すべくこれと生くべくして危わざらしむるなり。天とは、陰陽・寒暑・時制なり。地とは遠近・險易・廣狹・死生なり。將とは、智・信・仁・勇・嚴なり。法とは、曲制・官道・主用なり。凡そ此の五者は、將は聞かざること莫きも、これを知る者は勝ち、知らざる者は勝たず。故にこれを校ぶるに計を以てして、其の情を索む。曰わく、主孰れか有道なる、將孰れか有能なる、天地孰れか得たる、法令孰れか行なわる、兵衆孰れか强き、士卒孰れか練りたる、賞罰孰れか明らかなると。吾れ此れを以て勝負を知る。

④ 五危

故に將に五危あり。必死は殺され、必生は虜にされ、忿速は侮られ、廉潔は辱しめられ、愛民は煩さる。凡そ此の五つの者は將の過ちなり、用兵の災なり。軍を覆し將を殺すは必らず五危を以てす。察せざるべからざるなり。

五

戰爭の客觀的な現象を分析し、主導性・主體性の確保を主張し、動的なものと捉えたが、その現實主義的態度は合理的なものへ連なる。卽ち、戰爭の勝利の條件は充分に敵我双方の客觀情況をはかるに在るとし、これより鬼神と祈禱に助けを求めることをしないのである。無神論的な色彩が認められる。

故に明主賢將の動きて人に勝ち、成功の衆に出ずる所以の者は先知なり。先知なる者は鬼神に取るべからず。事に象るべからず。度に驗するべからず。必らず人に取りて敵の情を知る者なり。（用間篇）

聰明な君主やすぐれた將軍が兵を動かして敵に勝ち、人なみはずれた成功を收める理由は、あらかじめ敵情を知ることによってである。あらかじめ知ることは鬼神のおかげ、卽ち祈ったり占ったりする神祕的な方法でできるのではなく、過去の出來事によって類推できるものでもなく、自然法則によってためし知るのでもない。必らず人すなわち間諜からきいてこそ、敵の實情が知れるのである。

とともに、人間の力で左右することの出來ないものとして、天に關係したものとしては、四季の變化・晴雨・

晝夜・寒暑・時の適不適等があり、地に關係したものとしては、遠近・險易・廣狹・死地・生地等がある。これらのものは人力をもって變えることは出來ないが、その不利を避けることも、逆に利用することも出來るのである。戰術とは、人間が人間の力で敵に打ち勝つ術であるべきである。

それまでの戰爭の場合の占いは、宿命論的でもあれば、宗教的ともいえるが、それから戰術を切りはなし、人間の力を全面的に認める方向に持って行ったのである。

要するに孫子は無數の戰爭の經驗を綜合し、全體的に戰爭の勝敗の客觀的要素—政治と經濟、將帥と士兵、天時と地利等をみたのであり、敵我双方の土地の大小、物産の多少、人口の衆寡等の力量の同じからざるをもととして、勝敗の物質的基礎としたのである。

六

最後に孫子の將帥觀について述べようと思う。將帥觀は理想の人間像ということになろう。一つの人間觀として考察してみたいと思う。

孫子は將帥の條件と修養を重視し、將帥の働きは戰爭の勝敗、國家の安危に關係すると爲す。かかる觀點から將帥たるものは、全面的知識、全面的才能、完善な性格、高度の責任心と優良な作風を有すべきであるとする。

全面的知識とは、正確に敵我双方の政治・天時・地利・將領・法制等の全面的情況を瞭解し、正確な情況判斷を爲し、勝利の條件が充分であるか不充分かをはかることであり、このようにして勝利を豫見することができる。國際情勢を分析し、主導性を取るのである。敵人の企圖を明確にし、地形の險易を研究し、道路の遠近を計算し、勝利の計畫を定めるのであり、各種の機變の運用に精通し、問題を全面的に考慮するのである。要するに「彼を知り、己を知る」ことである。

全面的才能とは、利害を分析し、國王に聽信せしめ、部下の兵を利することである。謹愼的態度をとり戰爭を指導するのである。謹愼的態度とは「利に非ざれば動かず、得るに非ざれば用いず、危うきに非ざれば戰わず」（火攻篇）の態度である。善く軍隊を指揮し、善く主導權を取る。自己を不敗の地位に處らしむるのである。戰法は常に變化し、計謀は不斷に更新するが、軍隊の士氣・心理を掌握し、軍隊の戰鬪力と戰略戰術上の機動を掌握し、力めて敵人の主宰と爲ることを求める。善く各種の間諜を使い、微妙な鬪爭を進行し、善く軍隊をはか

り、善く士兵を教育・愛護し、部隊を管理し、紀律を執行し賞罰を嚴明にする。

完善の性格とは五種の性格上の缺陷を克服するものである。

必死は殺され、必生は虜にされ、忿速は侮られ、廉潔は辱しめられ、愛民は煩さる。（九變篇）

これが五危であり、勇氣があって智謀が無く、決死の覺悟でいる者は殺され、生を貪り死をおそれる人は捕虜にされ、氣みじかな人は怒りっぽく侮どられ、廉潔の人は侮辱せられ、仁愛の人は容易に果斷をしないのである。この性格上の缺陷が軍隊を覆滅させ、將軍を戰死させるのであるから、これを克服しなければならない。

高度の責任心とは

進んで名を求めず、退いて罪を避けず、唯だ民を是れ保つ。（地形篇）

のである。即ち軍を進めるときには功名を求めないし、軍を退却させるときには罪にふれることを恐れない。ただ人民を安全にすることだけを考えるのである。

優良の作風とは

靜かにして以て幽く、正しくして以て治まる。（九地篇）

ことである。即ち、將軍たるものは、靜かで奥深く、公正で整っていなければならない。よく兵士たちの目をくらまして、軍の計畫を知らせないようにし、軍の仕事を途中で變えその策謀を更新しても、人々に意識されないようにし、兵士の駐屯地を變えその行路を迂廻しても、人々にこれについて考えられないようにするのである。

以上が將帥たる者の條件であり、孫子が理想とした人間像と考えられる。